

現代家政学の動向と私の課題

福島 フ ミ

The Trend of Modern Home Economics and My Project

by

Fumi FUKUSHIMA

はじめに

家政学は家庭を基盤としての人間生活の研究をする学問として、二十世紀末のこの激動する時代に特に重要な使命を持っている。

その研究に携わる者としてその動向を広く理解しその上に立って自らの課題を定め、これに取り組むたいと考えここに考察を試みる次第であり、内容の構成は次の通りである。

- I. 1972年の学会活動の展望。
- II. 日本の家政学のあゆみ。
- III. 世界の家政学のあゆみ。
- VI. 家政学という名称と内容の動き。
- V. 私の研究課題。

I. 1972年の学会活動の展望

先づ本年開かれた各家政学会について、並列して比較する所から考えてゆく。

第12回 国際家政学会

1972. 7

於 フィンランド・ヘルシンキ工業技術大学

(参加者) 世界46ヶ国より約 1,000名、日本からは54名参加した。

(現在会長国) スイス。(副会長国) アメリカ、オーストリア、日本。

〈テーマ〉「Home Economics. A Vital Force」——家政学 その偉大な力——

近年の社会状況のさまざまな問題に対して家政学が果たすべき役割は多々あるので、その偉大な力を発揮しなければならないという考えに立って主題をさらに次のように分けて研究。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. 生涯教育における家政学の力—— | — a. 青少年にとっての問題。 |
| 2. 個人生活にとっての家政学—— | — b. 成人にとっての問題。 |
| | — c. 老人にとっての問題。 |
| 3. 社会開発発展に対する家政学の力—— | — a. 先進工業国にとっての問題。 |
| | — b. 低開発国における問題。 |
| | — c. 外国移民を多く含む国の場合。 |

以上の課題を見ると家政学をあらゆる角度から研究しようという事であって従来の各論的(衣・食・住等)課題がないのが、この大会の一つの傾向であろう。

そして各課題に対して、基調講演が行なわれ、その後各課題別に小グループ討議を行ない、その結果を Generalsession に報告し、さらに論議を深めて決議する。この決議を次回の大会のプログラムの基調とするという事でここに学会活動の累積による進歩がある。

— 次回は1976年カナダにて開催の予定 —

第24回 日本家政学会総会

1972.10 於 実践女子大学

〈学会の規模と会長〉 全国を7ブロックに分けて支部を設置
全会員数 約 3,500名

会 長 松元文子(お茶の水女子大)

〈シンポジウム・テーマ〉 ——家政学と社会の要請——

人間生活に直接間接に福祉をもたらす家政学が、激しく動揺している現代社会の要請にどのように取り組むべきかについて研究、討議を行なった

分科会—
—食物学, 被服学, 住居学, 児童学
—家庭経営, 家庭科教育

各専門分野別に研究発表及び Discussion. さらに Generalsession に報告, 全体討議を行なった。

第18回 日本家政学会中部支部総会

1972.5 於 岐阜大学

〈中部ブロック〉 愛知, 岐阜, 三重, 福井, 石川, 富山, 長野(7県)

支部長 広 正義(名古屋女子大学)

〈シンポジウム・テーマ〉 家政学の社会的使命 (副題) ——家政学教育について——

〈研究発表〉 各分科会

第17回 日本家政学会中部支部例会

1972.11 於 すみれ短大

〈シンポジウム・テーマ〉 家政学の社会的使命 (副題) ——家政学と地域社会——

以上国際及び日本そして当中部地区の学会活動を通観してみるとそのテーマのいずれもが家政学が社会に対して果たすべき役割とそれを推進する力を考える所に一致を見るがこのことは現代家政学研究の焦点と考えられるのである。

Ⅱ. 日本の家政学のあゆみ

さて日本の家政学は学問としての歴史も浅く、学術会議における位置付けもまだ確立せず、いわゆる学界におけるはっきりした市民権を持っていない。家庭を基盤とする家族、即ち人間の生活を研究対象とする所から、人文、社会、自然、各科学の総合的応用的実践科学である家政学の複雑な構成は学問としての体系付けが簡単に出来ないのも、こうした所に雑学とか未成熟な学問とかいわれる所似があると考えられるのである。

(家政学は医学や教育学等人間を研究対象とする学問の共通な性格をもっている)

さて日本の家庭生活の古きを遡って見ると古代奈良朝時代の外来思想儒教における「三従七去」の訓と中世の武士道精神は日本の生活史を貫いて家庭生活の規範となっていた。

近世江戸期は特にその最盛確立の時であり公事に対して家事は私的内緒事、女の仕事として低く見られ、裁縫洗濯、調理、紡染、機織、育児等これらは行儀作法と合わせて、祖母、母、

姑、又は女中頭というような人々から伝授されるという形で仕込まれ、女訓書としては、女誠論語、女孝経、女実語教、女今川、女大学があった。女大学は貝原益軒の著といわれ、儒教思想に基くきびしい女訓書として、江戸時代の女子修身の道を記したものであった。

又、貝軒十訓の内の家道訓には家庭経済や家庭管理についても述べられていた。

「家ををさむるにも忍の字を用ふべし。忍とはこらふるなり、堪忍するをいふ。おごりをおさえて、欲をほしいままにせざるもこらふるなり。又わが家の貧なるをこらへて、人をむさぼらざるべし云々」「婦女はうまれつき陰柔にして智なく、多くは姦邪なり、正道にしたがひがたし、云々」等、これらは江戸時代の女性史を具さに物語っているものである。つづいて明治となり日本は世界に目をひらき大きな思想革命であったが、家庭における夫婦の道は、国における忠君愛国の思想そのものであり、夫を天と仰ぎ……という女大学的な生活習俗はその後長く続いて来たのであった。

明治初期、外国の家政書の翻訳も行なわれ欧風生活の様式や技術が導入されこの労作は家政学発展史に大きな貢献をしている。その後、女子教育の範疇において多くの書物を残し又、斯道発展に貢献した明治、大正期からの主なる人々を上げてみると、およそ次の各氏等であった。

〈明治・大正〉	〈昭和〉	
下田 歌子——実践女学校創立	青木 誠 四 郎	吉 岡 弥 生
成瀬 仁蔵——日本女子大学創立	菱 山 衡 平	竹 内 茂 代
井上 秀子——同校校長	倉 橋 惣 三	今 和 次 郎
野口 保興——東京女子師範学校副校長	鳩 山 薫 子	木 桧 恕 一
鳩山 春子——共立女子職業学校創立	西 野 み よ し	黒 川 喜 太 郎
渡辺辰五郎——渡辺裁縫女学校創立	一 戸 伊 勢	中 原 賢 次
堀越千代子——和洋裁縫女学校創立	近 藤 耕 蔵	山 本 キ ャ
戸板 関子——戸板裁縫女学校創立	松 平 友 子	安 東 テ イ
大江 スミ——家政学院創立	波 多 腰 ヤ ス	等
森本 厚吉——東京女子経済専門学校 創立	上 田 柳 子	
佐柏 矩——栄養学校創立	大 橋 広	
大妻こたか——大妻裁縫女学校創立	氏 家 寿 子	
	山 下 栄 三	(順序不同)

以上が現代家政学への道を拓き、その啓蒙と発展に尽した人々であり、これを通観すると家政学発展史は女子教育発展の過程においてその中核をなしていた事がよく解るのである。かくして女子教育の基本的理念は一貫した良妻賢母教育論であり、家事、裁縫、割烹、育児、家庭看護、家庭経済、家庭管理等の各論を通して古い家制度における妻の役目や家事技術伝授のための訓であった。

その後、時代の推移に伴い昭和の今日に至ってはこれらの方法的技術には近代科学を導入して各論としての進歩は著しいものがあるが、家政学としての組織的、有機的な構造の内容総括的思考には及んでいないのではないだろうか。

即ち各論の研究が家庭の生活や生活文化の発展にどの様な価値をもたらすかという点においてその研究の姿勢に遺憾な点を多々見るのである。

純粋科学の研究は没価値的であるべきであるが応用科学としての家政学においては価値の追究は、又必然となって来るのである。

近代科学は極度の専門化、細分化によってその総合がなされず、これでは学問の分裂であり科学の危機であるといわれる。この様相が家政学研究の中にも見られるが、家政学の本質に立って総合の科学として、学問そのものの目的、即ち「学問は社会文化の発展に寄与し、人類の福祉に貢献する」という原点に立って家政学独自の目的である家族生活を基盤とする人間生活の発展即ち社会との関係に於いて家族集団の強化と家族メンバー各個人の最大限の成長発展を旨とするものでなければならないと考える。

こうした考え方に立って現在の家政学教育を見ると、家政学についての一般的イメージは被服や食物に関する技術教育が主であるように受けとられ、又中学、高校の家庭科教育にもその傾向がみられるのである。

大学家政学科に於ける被服や食物というこの分化は専門家養成としての意義は認めるがその内容は家政学科とは、ただ名称のみ習慣的に食物や被服の上に冠っているだけであって、家政学の本質に立って考えられているとはいえない場合が多いのではないだろうか。更に家政教育そのものがある意味では伝統的技術の伝承が中心となっていて、新時代に対処して未来を開くといういわゆる生活者としての自立性創造性を助長して来たかどうかの反省もしなければならないと思うのである。

家政学の技術教育が非常に重要であった時代もあった。

さて此処でもう一度現代生活史を遡って考察してみると、日本の生活文化の発展過程において生活技術が家庭生活にとって、かくべからざる重要なものであった時代が非常に長く続いて来た事も知らなければならない。

明治4年、産業革命があったとはいえ明治期は勿論、大正初期に至っても農耕民族であった為もあって、衣食に関しては家庭で原材料から生産しこれを被服に食物に調製するのが主婦の役割の大半を占めていた。更に第2次世界大戦が激烈になった昭和15年頃からの戦時体制下に於いては、日常消費の諸物資は日を追って極度の窮乏に落込み、各家庭は衣食の糧を原始生活のように自然に挑んで家族によって自給自足し、大時代的な生活からやり直し、この難関をやりやくにして突破し、今日の文化の礎石を作ったのであった。この中心的役割を果たしたのが主婦であった事はいうまでもない。従ってこの時代を生きぬくためには広い生産技術や生活技術の習得は必死であり、この時代に処して家政学教育の果たした役割は重且つ大であったのである。

しかしその後、日本はこの窮乏生活から立ち上るため、戦後史に見るように経済の高度成長をめざして行政力を集中し、企業の振興、科学技術の進歩に極力努力した結果、他の国々では何十年もかかった程の長足の進歩を約15年位の間に成しとげ、飛躍的に工業先進国、経済大国にのし上った。このようにしてすべての生活物資は社会における大量生産と貿易の自由化により今や必需を越えて豊満過剰の様相を呈するに至り更に被服や食物の加工産業の発達と家庭電化機械の普及により家事労働は非常に省力化し、今や技術の時代はすぎて我々は情報の氾濫する中で価値の選択 (Value selection) と意志決定 (Decision making) にせまられているのである。

このように現代における原始的な生活は忽ちにして高度の文化生活へと転換し、このあまり

にも急激な変化は幾多並行すべき諸問題間にテンポのずれを生じ各種各様の不調和や公害が続発し交通戦争，自然破壊，環境汚染等人間の生命は極度の危機にさらされるに至りこのことは実に容易ならざる事態を現出し，今日ほど進歩と調和の重要性を思い知らされた事はかつてなかった我々現在の体験といえよう。

この様な社会の変貌は家庭生活も当然つよくその影響をうけ，且つ又家族に関する制度の変革とともに人間の基礎集団即ち家族共同体の形態も機能も変り，今や新しき時代への過渡期にあり新旧二重構造の複雑な多くの問題に直面している。人と物との両面を包括している家政学はその成立の原点をより新しい研究思考の角度に立って再検討し，人間の生態学的進化の過程を理解し意図的な適応能力の開発と未来予測的な研究への努力こそ，現代家政学の重要な社会的使命であろう。

こうした中で日本の家政学会は前記の今年の国際家政学会への Information Sheet を次のように提出した。

Information Sheet

A 1. 意義

家政学は，家庭生活を中心として，これと緊密な関係にある社会事象に延長し，さらにこれらと環境との相互作用について，人的・物質的の両面から研究して，家庭生活の向上とともに人間開発をはかり，人類の幸福増進に貢献する実証的・実践的科学である。

2. 家政学に関する理念あるいは重要な意見

対象

家庭生活は，人間生活の基盤であることから，これを中心として，個人・家族・ならびに地域の生活について研究するが，近年家庭の機能がますます社会化される傾向にあるので家政学の研究をこれと緊密な関係にある社会事象に延長し，さらにこれらと環境との相互作用について研究する。以上のような研究は，人類の幸福増進につらなると考える。

方法

家政学は，自然・社会・人文の諸科学を基盤として，家庭生活に関する諸法則を明らかにし，実生活に役立つ研究をする。

3. 目的

(1) 一般目的……家族の幸福増進・人類の福祉増進

(2) 具体目標

ア. 家庭生活の向上

- ①健康，②家族の親切と民主的な関係，
③精神的な安定，④経済生活の安定，⑤適切な教養・娯楽，⑥子どもの出生と教育，⑦科学的・芸術的な衣食住，⑧家庭生活技術の向上，⑨伝統の保持と改善，
⑩地域社会，国家，人類への貢献

イ. 人間開発

人間の成長・発達 } 身体的
精神的 (能力の発達を含む)
社会的

B その他

次のような諸説もある。

- (1) 生活科学として，衣食住等広く人間の生活の研究をする。
(2) 家庭経営を家政学の中心として体系化する。
(3) 科学だけでなく，芸術・技能を加えた学芸とする。
(4) 職業を重視する。

この意義は1902年，米の Lake. Placid 会議（家政学会の前身）第4回の Statment と相通ずるものであり人間生活を広汎に捉えて研究するものである。すなわち，

「家政学は一方では人間の物理的な環境について，他方では人間の社会的存在の本質についてこの両者の関係を究明する。つまり物と人との関係の学である」と提唱している。

このように現代家政学は変貌する社会に対処して家族即ち人間中心的に研究するようになり、この事は家政学が時代と共に変貌していく事を如実に物語っているのである。

Ⅲ. 世界における家政学のあゆみ

さて比較家政学的に世界の家政学史を見ると、今井、松下氏によって思想史的に研究された「家政経営史」がよい資料であり、それによればまず古代における家政経営はその緒を旧約聖書、箴言の中に見出す事が出来ると述べられている。

・箴言六章 6～8節

“なまけ者よりアリの所へゆき、そのすることを見て知恵を得よ。アリはかしらなく、つかさなく、王もないが、夏のうちに食物をそなえ、刈入れの時にかてを集める”

・箴言三一章 15節

“かの女はまだ夜のあけぬうちに起きてその家の者の食べ物を備え、その女たちの日用の分を与える”

・箴言三一章 16節

“かの女は畑をよく考えてそれを買ひ、その手の働きの実をもってブドー畑をつくる”

・箴言二〇章 13節

“眠りを愛してはいけない。そうすれば貧しくなる。目を開け、そうすればパンに飽くことが出来る”

以上の他にも3節ほどを挙げ、時間とエネルギーの関係における労働の知的配慮の価値と意義を称賛し更に労働面ばかりでなく精神面でも妻の家政上の役割を尊重している。更に

・創世紀二章 23節

“最初の男は最初の女の前でいった「これこそついに私の骨の骨、私の肉の肉」”

・創世紀二章 24節

“すべての男はその父と母を離れ、妻と結び合い、一体となるべきである”

このように旧約聖書は神によりたのむ賢い妻を

“かの女の価はすべての真珠よりはるかに高い。かの女は夫に幸福をもたらしめ、その日々を倍にし、糸を紡ぎ、料理を作り、ともしびを見張り、昼も夜も働き、しかしながら上品な着物を着て、社会関係において夫を助け、と謳ったのである。”まことにそのような賢い妻の知恵によって家はたてられ（箴言二四章3節）そのような家政こそ、社会、教会、国家の中心であり、人間の回復と向上の核心である」とされた。

妻が多くの子供の母、よき主婦、男の助力者であることは勿論、それらの働きを通して女性が一般の人間の列に引上げられた事は重要である。このように知恵の形で表現されたヘブライの妻は次のギリシャ、ローマの妻たちよりはるかに高い倫理的水準をもった家政に達していた事がうかがえると述べられている。

更にギリシャの哲学者であり歴史家であった Xenophon (BC, 435～354) の家政論 (Oikonomikos) はギリシャのイスキマクス (Ischomachus) がその妻に行った家政訓であり現代の家庭経営に対して十分な示唆を蔵している古典である。（この書物は本学図書館に所蔵）

古代ギリシャでは女性は完全な人格を認められず、男は三人の女性をもつ事が認められ一人は正妻であって嫡出子を生むためのもの一人は家政婦、一人は娼婦であったという。更にアリストテレス (Aristoteles, BC, 384～322) もその著書、政治学の中に家に関する事について

述べて居り、ギリシャの家政論は家政秩序の問題をとり上げ更に特質は家政の目標であると
し、富についての経済論よりもその倫理的規定にあったという事ができる。

中世に入りローマ帝国の分裂と共に学問や思想、生活等の混迷の中に新しい世界観——家政
経営観をもたらししたのはキリスト教的思想である。この時代に家政経営理念にすぐれた歴史的
影響を残した人に、トマス・アクイナス、(Thomas von Aquin)マルチン・ルター (Martin
Lulher) がある。トマス・アクイナスは結婚は人類の種族保存と増加という意味で自然現象
であるが、単なる自然現象でなく男女が道徳的に向上させられるところに神による永続的結合
と理解されている。そして家政の本源的関係は欲求充足というような本能からは導びかれずキ
リストの名と理性のもとに遂行されるという。

このようなカトリック的な考え方に対して、プロテスタントのマルチン・ルターは家族を国
家または世界という結合体と信仰的共同体との具体的な中間体として把握する。そして家政の
秩序が教会及び国家の重要な基礎として認識されている。

又、トマス・アクイナスは“働らかざるもの食うべからず、”と労働を賛美し、 Benjamin
Franklin は“時は金なり、”という生活理念を主唱し勤勉こそ、富と名声を得る手段であると
考え、自戒のために有名な13の道徳律を残しているがこれは家庭管理の基本的目標の原型を含
んでいると考えられる。

Franklin の13の道徳律

- | | |
|---------|--|
| 1. 撰 生 | 飽くほど食うなかれ、酔うまで飲むなかれ。 |
| 2. 沈 黙 | 自他に益なきことを語るなかれ、駄弁を弄するなかれ。 |
| 3. 規 律 | 物はすべて所を定めておくべし、仕事はすべて時を定めてなすべし。 |
| 4. 決 断 | なすべきことをなさんと決心すべし、決心した事は必ず実行すべし。 |
| 5. 節 約 | 自他に益なきことに銭を費すなかれ、すなわち浪費するなかれ。 |
| 6. 勤 勉 | 時間を空費するなかれ、常々何か益ある事に従うべし、無用の行ないはすべて
断つべし。 |
| 7. 誠 実 | 詐りを用いて人害することなかれ。
心事は無邪気に公正に保つべし、口に出すこともまたしかるべし。 |
| 8. 正 義 | 他人の利益を毀損し、あるいは与うべきを与えずして人に損害を及ぼすべから
ず。 |
| 9. 中 庸 | 極端を避くべし、顧みてわれに罪ありと思わば人の非難と不法を忍ぶべし。 |
| 10. 清 潔 | 身体、衣服、住居に不潔の痕を存せしむべからず。 |
| 11. 平 静 | 小事、日常茶飯事、または避け難き出来ごとに平静を失うことなかれ。 |
| 12. 純 潔 | 健康または子孫をつくるために非ざれば女色に耽るなかれ。
汝自身を愚鈍にし、弱点をつくり、傷つけざらんために。
また他人の平和や名声をおかさざらんために。 |
| 13. 謙 讓 | イエスやソクラテスに見習うべし。 |

以上を見るとヨーロッパに於いても物財管理技術論より初り近代的生活観の覚醒へと進んで
いる。次に19世紀に入り C. Beecher や E. Willard 等によって教育課程に家政 (Household)
がとり入れられ家庭における食物や被服について指導されるに至り、 Beecher は家政学に関
する著作を二冊出版した。

1. A Treatise on Domestic Economy for the Use of Young Ladies at Home and

at School. (1841)

2. Miss Beecher's Domestic Receipt Book. (1846)

更に家政学の母といわれる Richards も、かの有名なレーク・ブラシッド会議 —Lake. Placid Conferense— (1899~1908) を10年間にわたって指導し「この会議の現在の目的は主として時間やエネルギーに関し経済的方面における家庭の management を学校を通してアメリカの人々に教えることである。一旦家庭生活の本質が定立したならばそれらはあらゆる子供の教育の一部門となるにちがいない」と説いている。

次に home management の中で特に作業簡素化、家政能率論が発達しこの提唱者は Mrs. Christine Frederick と Mrs. Lillian Gilbreth であり更に Mundell も又一層作業簡素化を促進した。

続いて研究が進められたのは環境管理論であり、能率心理学の導入により新しい局面が展開され、人的管理論の拡充、生活計画論的研究の組織化等アメリカに於いて長足の進歩を見るに至った。研究及び教育における著名な人々は前記の他に、下記の各氏が挙げられる。

B. P. Andrews.	Fisher. & Emerson.	Wood Lindquist & Studley.
Helen Judy.	Gross. & Lewis.	R. Laban & F. C. Lawrence.
W. B. Pitkin.	Nickell. & Dorsey.	Futzsimmon. & White.
Crandoll.	Goodyear. & Klorh.	Nelson. N. Footeed. 等

以上日本と欧米との比較に於いて考えて見ると何れも物や技術に関する出発点を持ち、ヨーロッパとアメリカはその思想の相違が如実にその実際生活に反映されて居り、現代の日本は近代アメリカ家政学に負う所が大である。このように家政経営の理念と学とを最も発達させて来たアメリカの文化自身はヨーロッパ諸国から多く受け継いで居り、近代家政学がヘブライやギリシャ、ローマからの社会的遺産を受けついで来ていることと、密接に関係しているのである。

家政学の歴史の概観を見ると以上のように人間の歴史が地中海沿岸より発祥して居るにも拘らず、新しい国アメリカに於いて学問的發展が目ざましく、ヨーロッパにおいては学問として發展がなされなかった。これにはどのような要因があるのかを調べて見ると概要次のように考えられるのである。

A. アメリカで発達した要因と考えられるもの

1. 新しい国としてのアメリカでは産業革命後すべての生活の中で、Puritanism. Protestantism の思想に基き、現象を規定するだけでなく、社会進化論的に掟をたてて、更に価値をより高めようという、清新的な生活改善的な考え方が強かった。
2. 産業国家として豊富な国土と豊富な資源の中で、資源管理が必要であるという背景的土壌がこの發展を培った。即ち産業界における経営管理の急速な發展が家庭経営にも強く影響したと思われる。

更に Richards の優境学的見地（環境管理の科学）からの生活環境の改善への主調も特筆すべきである。

3. 次に大学制度の中にとり入れられ、学問的研究が積極的に進められ、教育としてこれが普及し更にアメリカ・Pragmatism の思想により一層助長されて今日に至っている。（1821年頃より Beecher により、教育課程の中に家政学を取り入れた。）

B. ヨーロッパで発達がおくれた原因と考えられるもの。

1. 全般的、概括的に見て、古い伝統的生活の中で、宗教的、規範的、習慣的な生活態度が強く、改善への意識より伝統継承的であったと考えられる。
宗教改革による新しい思想も一般の生活への浸透の為の土壌がなかったといえる。
2. 従って、大学制度の中にとり入れなかった為に、発達がおくれたと考えられる。しかし現在家庭生活に関する研究は非常に熱心であり一般の関心も高いが、それが家政大学という形ではなく教育としては各種学校の形態をとっている。

VI. 家政学という名称と内容の動き

さて家政学の考え方や名称についてはここ数年に亘って種々論議が重ねられているが、そのこと自体が家政学が未だ成長過程にある事を物語っているように思われる。日本家政学会の専門部会の一つである家政学原論研究会で討議を重ねてまとめた現状一覧を次に掲げ参考としたい。

第1説のAは家政学を存続する立場をとり1-Bは人間の生活と捉えて、生活学又は生活科学と改称を主唱し、第2説は家庭を経営体として考え、家政学を肯定している。

これらの考え方の発端は従来の家政学という名称は古いイメージが強いので、近代科学としての家政学の自他共に認識を改変したいという所にあると思われる。

アメリカに於いても同様な動きが見られ、先に述べたように家族生活即ち人間と家庭と社会の相互関係において研究するという点で人間生態学的研究が進められ、内容との一致のためにかつての Home Economics を次のように変更した大学があるのでその一部を挙げて見る。

コーネル大学———College of Human Ecology.

ペンシルバニア大学——College of Human Development.

ワイスコンシン大学——School of family Resources and Consumer Sciences.

S. 44. 10

わが国における家政学の考え方 (1), (2)

家政学原論研究会

説	目的	対象・名称	内容	学
第1説	1-A 生命の維持・発展 個人 家族集団 人類	家庭・生活 ↓ 緊密な関係の社会事象に延長 ↓ 人間と環境 家政学	家族 児童 食 衣 住 生活 物 技術 家庭経営	社会科学 自然科学 人文
	1-B 生命の維持・発展 個人 人類	人間の生活 生活学 (生活科学)	食 衣 住 児童 生活・技術 (家族・家庭経営)	自然科学 人文 (社会科学)
第2説	経営体として (組織体)	家政 家政学	家族 児童 家庭経営 食 衣 住 その他 人的要素 相互作用 家政環境	社会科学 人文 自然科学

カリフォルニア大学——Family and Consumer Science & Nutrition Division.

ワシントン大学——普及事業部のみ

Ext. of Human Resources 等

以上の学部名及び以下に記す情報は1971年9月家政学原論研究会総会において山本松代氏が「海外における家政学の動向」と題する講演の中で述べられたものである。

これ等の改名はアメリカ全土にある同系350余の大学の中で当時12大学だけであって、広大な国の事でありこの事が現在非常に顕著な問題であるとはいえないが、確にこうした動きは存在するという事であった。

その原因も長い間の模索と迷いの苦しみがあるようであるがそれは中々掴みにくくその一つと考えられる所は従来の Home Economics は Cooking や Sewing 又育児の事のみと考えられている事から脱け出したいという日本と同様な問題と、更に男性にも魅力あるものとして男女共修への道を促進したいという事も加味されているらしいとの事であった。

事実この改称によってコーネル大学では男子学生が集るようになったとの事であり、ワシントン大学は家庭ぐるみの普及事業が発展し新しい効果が地域開発の面からも見えて来たということである。

カリフォルニア大学にあってはこれに反し、今まで一つに纏っていた家政学部が諸コースに分散して室内装飾は美術部で、住居関係は建築学部で、家族関係は心理学部で、栄養関係は栄養学部が独立するという事になり、これに対して賛否両論あるということであった。

ヨーロッパでは家庭生活の研究は熱心であり一般の関心も高いが、前にも述べたように家政大学という形になっていない。家政学関係の学士課程のある国はイギリス、フィンランド、オランダ、スカンジナビヤ諸国くらいである。しかし一般の生活水準は高く生活問題には熱心である点は注目しなければならない。

その熱意は1908年に国際家政学会をスイスを発祥地として出発させているし、フランスを根拠地として国際家庭団体連盟と更に家庭関係の国際機関が発生している。

又イギリスを中心に International Institute of Home Economics. の案が国連の F. A. O. に持ちこまれ国際会議が続けられている。(ヨーロッパにおける家政学の内容について) そればかりでなく消費関係の教育や生協運動も盛んでオランダには国際消費者団体連盟の本部があり国際生協の本部がイギリスにある。又農村生活研究や地域開発に関連して housing の研究等が高いレベルで研究されている。しかし家政関係の教育機関は Junior-type のものが多いがその教育内容の密度の高さは相当なものであるとの事であった。

V. 私 の 課 題

以上の動向に鑑みて私は A. B. C. 次の三つの課題に取り組んでいる。

A. 近代的合理性と非合理性のバランスについて。

現代社会は科学技術の長足の進歩と経済の高度成長によって、あまりにも急激な合理化機械化が発展し、非人間的なメカニズムを現出しその中で人間は苦悩している。

勿論科学の進歩も人間の智力によるものでありこの進歩への欲求は益々テンポを早めて増大し、創造の世界はめざましく展開し、かつての不可能も新しい可能性により無限に拓かれていく。このことはいみじくもヘーゲルの辨証法に示される哲学的法則であり、これを否定すれわ

けにはいかない。「すべては生成流転し変化の過程の中にある……」といわれる通り、否定は停帯であり又その事実は後退を意味する事になるのであろう。

しかし人間は必ずしも合理的なものだけを求めているのではない。そして合理化による不満を解消するだけでなく、非合理的なものをつよく欲求する。この二つの欲求の充足によるバランスの上にこそ安定を得て心身の健康が築かれるのである。

現代は変化の過程に価値を見出すといわれる。このはげしい変化に対処し適応し更に前進する活力 (Vitality) と自己制御 (Feed back) の力をもたねばならない。それは幼児期からの家庭生活の中で次第に醸成され、更に社会的訓練によって造り上げられるものであろう。そして又日々の生活の繰返しの中で家庭には非合理的欲求の充足のための要素も多く、これにより社会的緊張の解消と共に明日へのエネルギーの再生産即ち生命を造り続けていくのである。

このように考えると激動する社会に生きて進むすべての人間にとって家庭の果す役割は実に重大である。こうした視点から家政学の研究にとり組んでいく。

（イスラエルのキブツの存在から類推して家庭、家族の存続に対して反論もある。しかし高度の文化をもつ自由主義国においてキブツにおけるような共産共有いわゆる一切の私有財産否定の体制に変転する事が可能か？ 又それが人間の幸福かどうかという事について簡単に考えることは出来ない。）

B. 家族関係の相互作用を通して倫理の確立をめざして

社会における基礎集団としての家族はゲマインシャフト (Gemeinschaft) 即ち愛情によって結ばれた親愛なる集団であって社会の他のどの集団とも異った特質をもっている。

この小集団は結婚、出産という生物的社会的な関係によって成立し、親子同胞は身体的に多くの相似性 (皮膚, 毛髪, 瞳の色又声, 体格等) と血液型の様に決定的な法則のもとに家族は相通じて居り、更に又その家庭の固有な文化遺産ともいべき家風を引つぎ、永続的な人間関係をもって感情融合の生活合一をつづけていく。こうした中で子供は生れ育ち成長し社会へと独立していく。つまりやがて社会に送り出すべく愛児を育て、又その過程において親も又人間的に成長をつづけていく。又家族が社会を形成するのか、或は社会が家族のシステムを規定するのかと考えるとこれは何れともいえず相対的な関係をもつと考えられる。従って家族はその外的社会環境から切はなす事は出来ない。

家族関係においてその構成員各人の調和がうまくとれた家庭は容易に社会と共に進歩する。この家族成員の調和の根源をなすものは家族意識でありそこから生れた家族愛であろう。この家族愛がきわめて自然に育つ所に家庭の幸福が築かれる事はいうでもなく、家庭の幸福は社会の幸福へ、そして真の平和へとつながるといふ。では何がどの様につながるかと考えればそれは人間の心の問題であり、家族愛即ち人間愛が社会愛、人類愛へと昇華する所に最も大切な問題があると考えるのである。家族愛すなわち夫婦、親子、兄弟姉妹、老人と若人、これらいわゆる「對」の人間関係とその愛は次の様に考えられるのではないだろうか。

1. 夫婦愛 (受容と努力で築く愛, 人間愛)

男性と女性の対等の関係即ち民主的に役割分担をして責任を持ち合い家庭を築き、愛情を育て、両者は個人的にも社会的にも成長し、やがて子の親としての責任を果していく。

2. 親子愛 (自然的, 本能的, 献身的な愛情)

最も純粋な愛情であり、肉親としての上下の人間関係の中で互いに人格尊重, 相互扶助の関係

3. 兄弟姉妹の愛（同胞愛、仲間愛、友愛）

親を同じくする年令の近い仲間関係、長幼の序による年令的秩序における相互理解の協力関係、又競争相手でもある。このことは同胞愛から友愛→人間愛→社会愛→社会の成員意識、市民意識の発生源となるであろう。

4. 老人と若人（先輩・後輩関係の愛）

敬愛と慰安、信頼と期待。

以上の様に民主的な家庭は集団生活の Training の場であり、日常生活の中で自然な形で家族関係の中に育まれる愛は更に昇華して社会生活において極めて自然に対人関係の核心となり、社会浄化の根源となって社会の幸福を増進していくと考えられる。男女平等、人間尊重、自由と責任、自己形成、受容的態度、主体性、協力性これらはいわゆる Sein というよりも Sollen の問題としてアプローチし、物質のみが先行し精神文明の立遅れた現代社会における新しい倫理の確立のために家政学の重要なポイントであると考えるのである。

此処で付記しておきたい事は「愛」についてである。エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) がその著 -Art of Loving- の中で述べているように、「愛とは実存の問題への成熟した解答である。成熟した愛の形は本来の全体性と個性を持ったままの状態での合一（受容）で人間の活動的な力なのである。配慮、努力、責任、尊敬等、要するに愛は自己に対し、他者に対し、知情意即ちすべての活動の根源をなすものである。」と説く。この愛の理念を尊重するものである。

C. 家政学教育の実践において。

以上述べ来た諸問題の研究に基づき、これを教育の中に如何に生かすかが更に私の課題である。人間が現代を生き未来を開くという問題に取り組んでいく家政学に対して、学生が興味深く安定して研究出来、各自の生活に生かす力、更に問題解決へ努力する力、社会に貢献する力、いわゆる真の実力を養成し、家政学部に学んだ事に対する意義を学生が心から享受出来るようにその教育技法について工夫を重ねている。

次に家庭経営における私の指導計画とその方法を付記するので御批判と御高導を仰ぎたい。

家庭経営の指導内容

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 家政学原論をふまえて。 | (Motivation) |
| 2. 家庭経営学史 | (日本及び欧米) |
| 3. 家庭経営原理 | (Management cycle) |
| 4. 女性史の歴史的考察 | (日本及び欧米比較女性史の中より考える) |
| 5. 現代を生き、未来を開く | (現代社会の理解、人間、生きる姿勢) |
| 6. 家庭生活の本質と機能 | (家族、家庭、家族関係) |
| 7. 家庭の創設と生活 | (結婚の本質的研究、夫婦の役割) |
| 8. 家庭経済と生活設計 | (現状診断、ライフサイクルと計画) |
| 9. 時間とエネルギーの管理 | (人的資源と労働科学、レクリエーション) |
| 10. 子供の家庭教育 | (子供のパーソナリティー形成と家庭の役割) |
| 11. 衣、食、住に関する生活設計 | (自然と社会への適応と文化生活) |
| 12. 家族の健康管理 | (社会病理と精神衛生、家族計画) |
| 13. 家庭と地域社会 | (社会連帯意識、社会福祉等) |
| 14. ケーススタディー | (学生によるテーマ設定と研究) |
| 15. 総括 | |

以上の計画をすすめるに当り第一講においては慎重な動機付により家政学への興味を喚起する事につとめ 1. 及び 2. 3. については、数回に亘り講義形式をとり 4 以下はゼミナール形式で進めていく。

その目的と方法は次に記す通りであり、これをプリントして学生全員に配布し趣旨の徹底と共通理解につとめ実施に入っていく。

家政学研究ゼミナールについて。

クラス単位で（多人数）行なう変則ゼミナールを試みる

（目標）

学生が自我関与の意識をもって研究活動を進めることによって学問への興味を喚起し、意欲的に探求する態度を養い、能力の自己開発を目ざす。

（方法）

- ゼミナールとは研究発表を主とした共同研究の形式である。学生は小グループに分かれてテーマの研究に取り組み、これを発表してクラス全員で討議する。
- この教科において教師と学生は共同研究者であって、それぞれの立場と役割をよく理解し合って協力する。この準備段階の小グループ活動の中で教師と学生の緊密なコミュニケーションを特に重視する。
- グループにおける個人の責任は重大である。
個人ではできないこともグループの協力の中では可能になる。集団における個人の役割、即ち集団と個人についての経験は貴重である

（結果）

ゼミナールは以上のような目標をもって行なうので、学生の参加、協力の仕方如何によってその研究のレベルは高くも低くもなり、又各人の得る所も非常に差異を生ずる。そして重要なのは次の各項がゼミナールの過程を通して自然にトレーニングされる事である。

1. 思考力（考える力）
2. 理解力（正しく知る力）
3. 判断力（正しい理解で意志決定する力）
4. 洞察力（見ぬく力、見通す力）
5. 発表力（自己表現）
6. 話し方（判りやすい話し方）
7. 言葉（正しく快く伝達する手段）
8. 聞き方（人の話をよく聞く力）
9. エチケット（人を尊重する言動）
10. 自己認知（我を知る）
11. 対人認知（人を知る）
12. グループの連帯意識（共同責任と協調）
13. リーダーシップ、メンバーシップの訓練
14. 雰囲気作り、環境整備等

上記の目標に向ってゼミナール活動を続けているが、更にこれには研究グループと、クラス全員と、教師という三者のそれぞれの役割を明らかにし、組織的、有機的に進めなければならないので、そのシステム造りも行なっているが、その詳細はここでは省略する。

以上 A. は人間の力を。B. は心の豊かさの育成をポイントとし、そのことは家族生活を基盤として形成されるという視点に立つものであり C. は家政学教育を価値あるものにするための教育技法の研究である。

私はこの教育技法（Educational Technology）の研究には特に意を用い、かつては京都大学経済学部経営学科、同志社女子大学政学部、名古屋大学教育学部心理学科等における聴講や

ゼミナール参加をつづけ、更に1971年5月には米国スタンフォード大学をはじめカリフォルニア、コロンビヤ、ハワイ各大学における研究。教育の実際を見学し、又平常の学会や研究会活動、他大学との交流等によって広く学び得たものを通して、大学教育に携わる私の使命と責任を果すべく研究と工夫を重ね今日に至っている。

— お わ り に —

以上まで思考し来たり再び初めに戻り今年の国際学会のテーマを考える。

「家政学その偉大な力」と家政学者はつよく打出している。あらゆる学問が社会文化の発展と人類の福祉増進を目ざしている中で家政学もこの究極的目標にアプローチしなければならない。

人間は環境の影響に支配される受け手であると同時に、又環境に働きかけて新たに修正したりバランスをとったりする主体でもある。

現代家政学はこの人間関与とその人間の自己実現の力の育成と更に又社会浄化への貢献をその使命としてその偉大な力を発揮しなければならない。

福沢諭吉は明治の初期日本の近代化への変革期にかの有名な「学問のすすめ」を著述しその中で次のようなことを記している。

儒教の女訓、三従七去の特に「七去」に対してつよく反論し「天理にもとることを唱える者は孟子にても孔子にても遠慮に及ばず……」と。人間の生活史も今や更めて見直すべきことは非常に多い。現代に処して我々の役割の重大さを考え、更に深い思考と真の勇気をもたなければならないと痛感するのである。

諸学問は常識や抽象的な議論や事実認識に止ることなく、科学的方法ですべての事象、現象を検証し、究極は予測する事を価値と考えるといわれている。果しない学問の道を求めてひたすらに努力しなければと深く思う次第である。以上。

参 考 文 献

- 1) 今井光映：(1968) 家政学原理
- 2) 今井光映, 松下英夫：(1967) 新家政経営論
- 3) 原田一：(1965) 家政学の根本問題
- 4) S. F. リピート, H. I. ブラウン：(1971) 家政学の焦点と将来への展望
- 5) 家政学原論研究会会報 (1971) No. 3